

## 巻頭言

山口大・理学部

千葉喜彦

日本時間生物学会会長

時間生物学は、時間の関数として変化する生命現象のうち、とくに周期性を扱う学問分野で、研究の中心は、環境の側に割符をもつ周期現象 (circa-rhythm)にある。circa-rhythm が、homeostasis とともに生命の本質的側面であることが広く認識されるようになったのは1960年前後で、その象徴的できごととして Cold Spring Harbor Symposium で biological clock をテーマとしてとりあげたことがあげられる。

このころすでに、circadian rhythm についていうならば、同調性、温度補償性などの基本的性質の多くはわかっていて、趨勢は当然 pacemaker の所在あるいは oscillation の機構解明に向かっていた。と同時に注目すべきは、circa-rhythm の重要性に対する認識が医学、心理学などの分野で急速に高まっていったことである。

このような動きが我が国でもはっきり感じられるようになったのは1970年半ばころであった。爾来20年、別々に活動を続けてきた生物リズム研究会、臨床時間生物学研究会などが今回一つに融合して日本時間生物学会が成立したことはまことに喜ばしい。ここに至るまで力を尽くしてくださった先達ならびに両研究会の会員各位に心から謝意を表したい。

時間生物学の課題は、生命科学はもとより自然科学の諸分野の研究者を糾合してはじめて解明されるものである。また、生物の構造段階でいうならば、研究の対象は共同体、個体群から分子レベルまで及ぶ。日本時間生物学会が真の学際集団として発展し、世界の生物振動研究に貢献していくことを期待している。